

歲月過ぎて、現在の私は新たな幸せに恵まれました。優しい夫や愛しい子供に支えられています。クラスメートから寄せられる温かい友情などもございます。

毎年七月九日、佐世保のハウステンボスに近い「釜墓地霊園」で執り行われる戦没者慰霊祭に、テレビ局からのご縁を得て参列させていただきました。ここに父母の御霊も眠っていると信じながら心静かに冥福を祈っております。

満蒙開拓青少年義勇軍

長崎県 藤原安男

昭和十三年五月三日、長崎県先遣隊二百五十余人は諏訪神社の丸馬場に集合、県庁の係の人の諸注意があり、その後神社への祈願を行い、神社の正面長坂で全員の記念写真を撮った。近くの勝山小学校で壮行会があり、夜行列車で長崎駅を出発、翌日東京駅で下車、皇居遙拝、靖国神社参拝の後、上野駅から常磐線で茨

城県内原訓練所に向かった。五月五日内原訓練所着。そして、義勇軍としての訓練が始まった。

この訓練所では見知らぬ者同士であるから、特に団体生活に慣れるための訓練が主であった。

長崎県出身の半数と山形県出身で一個中隊が編成され、中隊は五個小隊に分かれ一個小隊ずつが日輪兵舎で起居を共にした。

お互いに言葉が通じない。ラジオもない時代。初めて聞く東北弁。これも日本人の言葉かと驚いたが相手も同じであったろうと思う。「カネのおわんに竹のはし、仏様でもあるまいに一膳飯とは情けなや」という『軍隊小唄』という歌があるが、それをもじった軍隊生活の「金の茶碗に金の箸、仏様でもあるまいに……」という言葉はそのまま義勇軍も同じで、金の茶碗の一膳飯だった。毎日の起居とまた軍隊と同じ、ラップで起きてラップで寝る生活であった。

私が物心ついたころは農家は全部が貧乏のどん底であり、貧乏人の子沢山であった。私は十一人兄弟の二男として生まれたが、農家では口減らしのため小学校

を卒業した者から次々に家を出て行くのが常であり、
国も国策として大陸への進出をおおった。「少年よ大
志を抱け。大陸は待っている。狭い日本にゃ住み飽い
た、支那にゃ四億の民が待つ。俺も行くから君も行け」、
学校では「農は国の大本なり」「公、侯、伯、子、男
爵よりも国を救うは肥柄杓」とか習い、また武士の時
代には士農工商といって農は武士の次であったが、い
つの間にか農が一番下になっていた。

私が満州に行くまでには、七人の兄弟が生まれてい
たが、そのうち三人は二、三歳で死亡した。それは貧
乏のため薬も買えず、もちろん医者に診てもらった金も
なく、病気になった子供は見捨てるほかなかったから
である。これが日本全国の農家の実情であり、国策の
まずさであったろう。

内原での訓練も終わりに近づき、各人に渡満服が支
給され渡満準備に入った。最年長で十九歳、最年少の
私は十四歳。氣候風土が異なる大陸に行くのであるか
ら、各種の予防注射、お灸など何日か続いた。

六月二十日私たちの中隊は渡満服に身を包み、ラッ

パ鼓隊の演奏する行進曲に送られて内原を後にした。

上野駅で下車、日の丸と満州国旗を先頭に東京市中
行進、皇居遙拜、靖国神社・明治神宮参拜、いよいよ
日本最後の地、神戸三宮駅より神戸港まで行進、客船
扶桑丸に乗船、日本とも当分お別れ、船は汽笛を大き
く鳴らして静かに岸壁を離れた。全員が白の手袋をし
て上甲板に整列、皇居の方に向かって一斉に拳手の敬
礼で日本にお別れをした。この時船内には日の丸行進
曲が流されていた。「母の背中に小さい手で振ったあ
の日の丸の」船は瀬戸内海を通り、一路大陸へ、
大連の港で下船、大陸に第一歩を印した。

初めて見る満州国、行く先も知らされていない私た
ちは列車に乗った。汽車は日本のものより一回り大き
い。北へ向かって走る車窓から見る大陸の広さに驚き、
奉天付近を通過するころは、日露戦争の話を思い出し、
二〇三高地、乃木將軍といろいろのことが頭に浮かん
だ。

出発してから何日にどこを通過したかは記憶にない
が、北安省綏化^{スヰカ}駅で下車、日本軍の駐屯地に立ち寄り

休息後、軍隊の護衛によりトラックに分乗して出発。

トラックはスピードを上げ土煙を巻き上げて走った。

その土煙のすごいこと。後で知ったのだが、この地方

は小豆大の石ころもない土だけの土地だそうで、行け

ども行けども草原が続く。小さな木一本生えていない、

人家一つ見えない。何時間走ったろうか、多分、四、

五時間は走ったろう。こうして六月二十六日、目的地

の北安省鉄驪^{チベット}県鉄驪大訓練所に入所。

義勇軍心得

一、古の武士に負けるな

一、生命を尊び死を怖れるな

一、仲良くせよ

一、他民族を敬せよ

一、家への便りを欠かすな

一、規律を重んじ命令に服せ

一、歩哨は任務を嚴重に守れ

一、武器は大切にし手入れを怠るな

一、独り外出するな

一、堂々と歩け

一、口を堅く結べ

一、愚痴を言うな

一、丈夫の時は身体を鍛練せよ

一、病氣の時は医者言うことを守れ

着いてまず驚いた。宿舎とは名ばかりの草（ヤン草）

でふいた三角の屋根だけがちよこんと地面に置いてあ

るだけ。高さ二メートルぐらい。中に入れば屋根に顔

がごつんごつん当たる。雨が降れば雨漏りがする。日

本の田舎の炭焼小屋と同じ。こんなのが人の住まいと

いえるのか、犬小屋にも劣る。電気もなければ水道も

ない。ランプの生活が始まった。昭和五年私が小学一

年生のとき私たちの故郷もはじめて電気がきたので、

それ以来のランプ生活であった。

驚くことはまだまだ続く。着いて間もなく全員が次々

とアメーバ赤痢にかかる。薬もなく、医者もいない。

医務室に行けば、医者らしい人がいて「君は三日絶食」

「君は五日絶食」と言うだけ。病院などもちろんない。

国策、国策と国民をあおってにおいて計画もなく、準

備もせず、ただ実行しただけ。政治家は何を考えてい

るんだ、青少年を満州まで送っておいてこれでいいのか。義勇軍心得にあるように、「愚痴をいうな、命令に従え」というのか。

それでも零下四十数度になる冬に備えて、宿舍造りを急がねばならない。病氣などに構っておれない。十四歳といえば現在の中学三年生、我々の青少年時代の人は精神的にも肉体的にも強かったなあと今になってつくづく思う。

家の骨組みは大工が造るが、屋根葺、壁塗り、オンドル用のトピーズ（土を水で練って煉瓦の二倍ぐらいの大きさに固め天日で乾かす）造りと作業は急ピッチで進む。

七月、八月の満州の暑さといったら、日本の比ではない。見渡すかぎりの原野、木も生えていないので木陰もない。河もない。この鉄驢付近は海拔七〇〇メートルぐらいとか聞く。大陸性気候で日本と違って湿度が非常に少なく、蒸し蒸ししないから過ごしやすく真夜中になると寒いぐらいだった。

このころになると、屯墾病（ホームシック）が続出。

頭が痛い、腹が痛いといって作業や訓練に出ない。満州の月は大きく、日本で見ると月の二倍ぐらいには見える。この月を見ると屯墾病はなおさらひどくなる。冬によく晴れた月の夜は狼の群れが獲物を求めて一斉にほえながら通り過ぎて行く。無理もない、十四、十五歳はまだ子供。

冬前には宿舍も完成する。床はオンドル、廊下（土間）にはペチカという立派なもの。冬になってオンドル不良とわかり、ペチカだけでは暖房不十分。外は零下四十数度、部屋の中で零下十度、寝ている掛布団の襟には自分が吐いた息で霧氷がついて真っ白になっているありさま。

私たちの時代の人は皆何事にも我慢強く、自然の生活の中に耐える訓練がなされていた。今になって振り返れば、懐かしい思い出としてよみがえる。

各人には小銃と弾百発が渡され、常に身近に置いておく。銃を持ったこともないのである。冬になり何もかも凍りついている広野では、早速に小銃の射撃訓練が始まる。標的を狙って撃てども弾は行方不明、標

的に一発も当たらない。小銃を持ったこともない者にいきなり実弾射撃とは、無理が通れば道理が引込む。

軍事教官は何も教えない。それでも数を重ねるうちに、狙う位置がわかり弾が当たるようになる。満州の気候は夏と冬があり、春と秋はないようなもの。九月の初めは暑い夏であったが、九月三十日に雪が降ったのには驚いた。暖かくなって雪が解けて実弾射撃をしたところに行ってみると小銃の弾がある、それでも弾はみんな踏みつぶしたようになっていて。凍りついた土に弾は負けたのである。

暑い夏の間草は伸び放題、人の背丈よりも高い。この原野を歩いていると、ノロ（日本の鹿に似た動物）が草の中で昼寝をしており、私たちの足音に驚いて飛び起きて走り出す。私たちはそのときの草のざわめく音に驚く。

昭和十五年、紀元二六〇〇年の歌を歌って間もなく、鉄驪大訓練所を修了（二年間）。次に吉林省敦化县大石頭小訓練所に移動する。所長は鹿兒島出身の陸軍少将川原侃閣下で当時六十歳ぐらい。ものすごい張り

切り屋さんで中隊長以下皆ビリビリしていた。

義勇軍は中隊ごとに約二キロメートル離れて駐屯していた。こうすることによって敵から包囲されにくくした。

大石頭はさすが南満、零下三十度ぐらい、北満とは十度の差、すごく暖かく感じる。大石頭の宿舎は立派なもの。鉄驪のは小隊ごとに別れていて、五十人ぐらいの全員の起居が見渡せる工事現場の飯場式であったが、大石頭のは五、六人が一部屋で起居し、オンドルペチカも本職が造ったものであった。大石頭小訓練所は一年で修了。これで三年間の訓練はすべて修了。

昭和十六年の末ごろ同じ敦化县（トウカイガン）の南黄泥河子、日高義勇開拓団に最終移動。ここに移動して間もなく、満州警察署から、日本が米・英と開戦したことを知らせにきた。

私が小学二年生の昭和六年九月に満州事変、同七年一月上海事変と続き、同八年三月日本は国際連盟を脱退し世界の孤児となった。この頃だったろうと思うが、小学校でローマ字を習い始めるが、直後、敵国語は使っ

たらいかんということ、例えば、ポケットは物入れ、タオルは手拭、ハンドルは転握ということでローマ字も習っていない。軍国主義一色、次いで日支事変、第二次世界大戦、戦後は物資不足、食糧難と、私たちの青春とは何だったろう。

昭和十七年の夏、軍隊志願をし甲種合格、この冬十一月中頃から十二月末まで渡満以来四年半ぶりに一時里帰り。同十八年一月十日、吉林市第五九〇部隊（第二独立守備隊歩兵第八大隊）に入隊。

私は小学生のころから将来は軍人で飯を食うんだとの夢を持っていたので、早速下士官候補者の志願をした。軍隊生活一年が過ぎて上等兵になった。

下士官候補者が入校する大連の教導学校に行くころ、アリューシャン列島のアツツ島の日本軍が玉砕したので、吉林市の兵営を夜中裏門からこっそり抜け出して、部隊移動開始。駅の方に行かないので不思議に思っていると、満人部落もない一面の雪野が原に黒い物が出現した。貨車であった。この貨車に乗って満州の真冬、凍った飯盒の飯を食べながら南下、着いた所が釜山。

ここで検疫のため二日間留まった。

釜山港から関釜連絡船に乗船するが、どこへ行くのかわからない。ただ命令のままに動くだけ。重機関銃隊だった私たちは船の帆柱の上で対空射撃の準備をした。門司に上陸。門司駅で汽車に乗る。軍用列車（ここから先は客車）は南か北かどちらに走ることやら、通過する駅名を見ると北に走っている。軍用列車は隠密行動のため、「走行中も窓を開けるな、駅に着く前に鎧戸を下ろせ」の命令。隊員の中には名古屋、静岡出身者が多くいたが、自分の出身地の駅に着いても外も見れない。

列車はどこまで走るつもりなのか。とうとう青森、青函連絡船で北海道に渡った。汽車はまた走る。着いた所は小樽の駅。駅には民家の人たちがたくさん迎えにきてくれていた。どうも民家に分宿のようだ。私と初年兵と二人、潮見台町の増田さん宅にお世話になった。

四月の末ごろ、小樽港を出て青森県の大湊港に回り、病人を下船させ、太平洋に出て北上するが、海の荒れ

ようといったらなかった。山のような大波に輸送船は木の葉のように浮き沈む。

何日船に乗っていたのか、小さな島に上陸。ここがまた草木も木も生えていない無人島。地図を見ると、カムチャツカ半島の鼻先にある北千島列島の最北端、^{シム}占守島だ。周囲五キロメートルもあるだろうか。一年中冬で草木が生えない理由がわかる。夏の季節には白夜で夜中も暗くならない。天気がよい日はカムチャツカ半島が肉眼で見える。

日本からは食糧を送っているのだろうが、島には着かない。食事は重湯しかないので栄養失調者が続出。六月末ごろになると小さな川の雪解け水に鮭が群れをなして産卵に上ってくる。一カ月ぐらいは鮭の掴み取りができるが、草木が生えていないので煮ることも焼くこともできない。水も満足にないので風呂などもちろんなし。顔も洗えない。体には皆虱^{しろうみ}がわく。栄養不足の体はこの虱に血を吸われ、ますます弱る。そうこうするうちにパラチフスが大発生。踏んだり蹴ったりとはこのことだろう。

ドラム缶を手に入れ、海岸から流木を拾い集め、露天風呂を造り、八カ月ぶりに風呂に入る。何と気持ち良いことか。

夏には日本の船団がたらば蟹を捕りに沖にくるので、蟹を軍で買い上げ、蟹と鮭の食事が一カ月ぐらいは続いた。蟹のおいしかったこと、今でも忘れられない。

島では毎日陣地構築、島中を穴だらけにした。

昭和十九年十二月一日付で陸軍伍長に昇任、重機関銃の分隊長になった。

占守島での耐乏生活もちょうど一年、昭和二十年五月本土決戦の命により、三分の一の兵を島に残し（後に全員戦死）オホーツク海を通り、宗谷海峡を経て日本海に出ようとしたとき、敵の魚雷攻撃により一隻が撃沈され、半数の兵が戦死、小樽に帰り着いたのは三分の一のみであった。小樽に数日いて、函館市に移動。函館市近くの（駒ヶ岳の麓）軍川村（現在亀田郡七飯町軍川）の小学校に宿泊し、陣地構築中、八月十五日正午に天皇陛下の重大放送があるから全員集合の伝達があり、校長先生の宿舎の前庭にてラジオ放送により

敗戦を知った。

早速函館に引き揚げ、常磐小学校に中隊全員が集まった。復員準備に入り、八月末ごろ中隊は解散、それぞれの故郷に散って行った。

私は中隊で一番若い下士官だったために兵隊四人と残務整理に残ることになり、同十一月中ごろ復員、七年半ぶりに我が家に帰った。帰り着いた日が十八日で、二十二歳の誕生日、そのとき家には二歳の双子の弟と五歳の弟らがいた。

昭和二十一年九月、長崎市消防局に就職。このころの長崎市は終戦後の食糧不足の真ただ中、麦の粥を食べて職務遂行。占守島でひもじい目にあい、またここでもひもじい目にあった。市内は食糧難のため、戦争中市外へ疎開していた人たちも市内への転入が許可にならない。日曜日に早速諫早市の実家に米を取りに行き空腹をしのいだ。

就職の辞令に本俸四十円とある。陸軍伍長では四十円だったのだが。最初の月給は百八十円ももらったが、独身寮の食費二百円で月給全部でも不足した。

昭和二十五年二月に結婚、同時に自分の家を新築、同三十年ごろになって物資が出回ったかなあという感じであった。それからが早かった。高度成長によるベアスアップで、同四十年には月給生活も楽になってきた。同四十五年現在地に前の家よりは少しましな家を新築した。昭和五十八年十一月定年退職（三十八年三カ月勤続）。

昭和六十二年十一月三日、秋の叙勲で勲五等瑞宝章を受章。皇居の豊明殿において、天皇陛下のお言葉の中の一部に「今後も健康に留意して国家社会のために尽くされんことを望みます」とありましたので、今では地域の会長など、また少年剣道の指導をして、いっらか地域社会のために役立っているつもりである。

戦争も知らない世代が、「平和、平和」と叫んでいるようだが、戦前・戦中・戦後を体験した者でなければ、本当の平和の有り難さはわからないのではないかと思う。